

伯國政府日本移民誘入可決

郷里の村を明朗化した荒堀氏の美夢

豪傑の主は
 バラナ州の
 サイに在る
 荒堀一俊氏
 (五九歳)
 岡七子夫
 人(五五歳)
 て、荒堀夫
 大万圓を恵み、村の小學
 館へはオランダ金四合を寄
 附した、更に夫人の出身
 村へは夫人の爲て現金廿
 三万圓を寄附してゐる。
 荒堀氏夫妻のこの美事に
 よつて村は一時に灯のつ
 いたように明かとなり、
 夫人は天々熱誠な感謝の
 意をこめた書き書きを配
 念に荒堀庄に附つてゐる
 となお荒堀氏は二十年前
 めてブラジルに渡航し、
 ととき下基氏から二百
 借金したが、今度歸つ
 世ると下基氏は既にこ
 村の人ではなく、阿蘭
 孫に當る下山龜一と
 見附かつたので兩人に
 金を百五十倍にして三
 圓返却し大に感謝す
 たという

に戦死して、戦死した者が六十八名出ていたことが解った。そこへ荒堀氏はそれら戦死三十名の遺族に五千圓贈り、その遺族に五千圓贈り、更に五十名の老人に五千圓贈り、計二十

七巴サシタ。マリナ連合青年團では日語小學校と合團主催の下に、来る十一月三日の文化の日祝賀式を舉行引續き午後二時からバラナ連合青年團第

二支部主催の剣道大會開催。木村俊夫氏寄贈優勝旗をめぐって参加チームが熱戦を演じた。本年度優勝はサシタ。マリナチーム(A)が



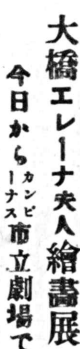
安藤生

劍道大會に立派な優勝旗や
賞が飾られた機になつた
。そしてそれを巡つては
争鬭され、競争せられる
ことも、劍道奨励やはつ違
に對しては効果果実の一つ
の手段であると思ふ。け
れども其手段に重點が置
かれ過ぎると所謂強ひた
のが勝、上手が勝、即ち
運動で云うと選手第一主
義と云ふ事となる。素質
に乏しく上手でない人々
の希望や興味を失われる

事となり、延いては勝た
せが爲の手段や方法に墮
れしむる事となる。鍛練
すべし、工夫研究すべし
と云ふ、工夫研究すべし
と云ふは、あるが、劍道は
あるが、劍道はひるへく
ななく行われる事が必要
で、また今日打物取つて
の役に立てる實際的に依
る精神的要素を以て社會
に導き入れ、且個人の内
神の充實を以て指導する
が、劍の往くべき道では
あるまいか、劍
社會を以て社會
の心を鍛へ、
に溶け込ませ
して初めて日本
は古來の精華を
えるのではある
。人々よくする
劍を良くする人
々、武道を云々
武道の心を身
に度いと思ひ
が良しとし、

農商銀行は南米脚場とは無關係だ

純日本式歌舞伎座に則つた「南米劇場」の建設は既に面目を失つたのであるが、目下南米中の日本建築界の權威坂倉準三の氏がこのあたつた設計原圖を檢討した結果、大抵漠然と日本式の劇場を建てたのでは意味をなさない、大衆から何時までも飽かれないよう周囲との調和を計ることが肝要だ、との意見から好意的に設計原圖の改正を申出で、武蔵授、太林、松岡等と共に着々新設計の作成を急いでいる、ところが世間では兎角南米劇場を農商銀行の事業であるかの如く誤解してゐるものが多い、が然し南米劇場株式會社は何ら農商銀行とは關係のないものであると農商銀行重役



◆ 日夜テアトロ・ムニシパ

文化の日に授與

三月三日午前十時半	共に出る文化勳章
皇居召見場所	陛下はひきつ
本年	正午から大民を招か
文化勳章授與式行	つたから大民を招か
天皇陛下臨席	三笠宮 吉田首相
右田首相から齊藤	文相も列席し下跪
波野辰次郎 中村	を賜り、終つてから
西川正治 光	柳田 武者小路氏
武者小路實篤	について、波野氏は
出男の大氏(小宮池)	にいて、波野氏は
氏に渡来中)に勳記さ	伎についてお話を申

ガ
ジ
ン
誌
再
刊

マゾン移民は職にな
土曜會同人の座談會
新聞出現、インチキ
賣り泥合戦等々、未
聞にはつ表されない」

小錢を盗んでドロ

月内アヲサツブナ市
 國田旅館に投宿した一
 人、少年に巧利を教
 ず、足が固なくなる、氣
 勝たが爲の劍や姿
 乱れる、自覺し乍ら
 を教えて大人の作爲を
 失つて居る 攻取の
 にはいけないと思ふ
 がにぶつて居る、試
 人の男、どうも暴動
 審なので旅館主が外

と思ふ、喜を望み 日常の鍛錬

吾の機を見て居ると日
 の霞の狀が良く察
 され、又動作に表れて
 然して來るのには本
 人に依つても自覺感さ
 る事であると思ふ。短
 い時間の試合には目
 立たないが、少し長引くと
 して居る氣を覺へて、
 思ひ度い
 體を行つて剣を突え
 たら既に眞劍相對の
 ちである事は勿論で
 が、立上り際に直ち
 掛けて挑むのは前述
 づから費するの意味
 つらぬ。兵法に試合
 合は正を以てするの
 詔であつて、斯る試
 合を稀に立断して
 ちを、決して立断す

四邨覺勝師の聲旋下園

町市ジャパトラの一隅 にささやかな説教所を建 立信徒を集めていた生駒 眞澄は近來めきくとい う信徒が増加して來たの は多ぶボスケ・ダ・サ ウーデ區ドミシゴスデ ・モリスに近い高木に廣 大な工場のあり、影太	聖算を以て一大寺院を建 立する計画をたて、すて に富屋敷付きの土地を購 入、さきこの盛大な座落 式まで舉行した事は當時 本紙に報道したが、その 後四寺のいわれる眞澄寺 派の建立委員の内に主管	地 院 前 明 出 案 建
---	---	--

生駒氏は、本願寺伯國開

ロイあたりの金持ちが
氣まぐれに建てたとい
つた印像しか受取れな
いてはなにか、一番乗
りをやるのもよいが、

大寺院はそのまゝ別院敷

勇士
人間ボン
パ延長線

パ
延
長
線
に
入
る

フナ各地の公演で好評
博した「人間ポンプ」
「小判鮫」が意々バウ
クス延長最長興行に乗
出、興行引受手はバウ
クスの日談興行社、日曜
を左の通り

七、八	九日マリリア
一、二日	ボンベシア
三、四日	ラパン
	バストス

在
外
事
務
所
電
話
新
設

和田事務官室	三五〇六八
受 附	三五〇六八
野崎所長室	三五〇六八

三五〇六八四六
附
その昔「球陽新報」

三五六八四七
 姉所長室
 三五一六八四八
 ロミツソン吉
 家のお芽出度
 ロエステ観プロミツツ
 群コロゴ・アズール植
 唱の人室家吉田喜典青
 男千鶴男長）「フ聯合共
 運動部長」は全群ボ

民夫妻の嫉妬によりバ
リスタ延長艦下ラセー
に活躍している、こ
希望者は多少に不拘

松崎茂八氏因女房子とめてたぐ婚約せる十一月十日戸底宅に於て華囀の典を挙げ讃に披露の祝宴を催したる父はプロモーション青年の育ての親であす、青い層の教育指導の爲粉砕砕の盡瘁して望まむに各補民地より二百余名に近來稀な盛宴であつ

命下さいとのこと

一七〇三九へ電話て

カフエラ
ア罪在住

結婚

三郎郎長男十八男君
七歳はカフエラ
川尾利一、アレクサリ
石力雄阿夫妻の媒酌
田要長女びて子さ
(廿一才)と去る十
十結婚、盛大な披露
を張つた

満解決

と、既成建勳は假別院兼本山の身となつて、眞澄寺自身は從弟吉ヤクヲヲ説教に服する之を主張したるに反して、主筆を握る。その他、三つの案を擬定數語を別院敷地とに實進を表し、眞澄寺正委員はその一、別院委員は全篇一意見あり

以餘に本山の身分たる院兼の職がまゝと委員を任命して運動をしていたので、此の度澄寺紛争を廣に同寺定數語を別院敷地に努力一兩は協力之にな

わ

またきた母國青年が

年 希望の方は手紙
いてあげて欲しい、
と文通し度という希
を述べた手紙が本社に
平賀寅次郎四下土丁

（名古屋市内）に勤務

ブ
に入る

本ほんの青年せいねん層そう・殊ことに外
交渉こうしやうのある仕事しごとにた
わつてゐる青年せいねんの伯
對たいする興味きうみと關心くわんしんを
一つの現あらわれと見てよ
う

一つの現れと見てよ

商賣往
宮城印刷所

その昔「球陽新報」

つ行していた富城松
は、土地賣りをやつ
たり、美容院を経営
見たり、轉々として
を替えていたが、悟
ころあり、新式印刷
及び活字一式を買込
遂に印刷屋さんに尻
つた。御所はボス
ダ。サウデ ブリ
ラ。セ。ワ。ン。ト。ラ
ハ。一三八番、兼

に活躍している、こ
希望者は多少に不拘

一七〇三九へ電話で
 命下さいとのこと
結婚 カフエラ
 ア群在住
 三郎周長男十九男君
 七歳はカフエラシ
 川尾利一、アレクサ
 石力雄兩夫妻の媒酌
 田要は長女ひで子
 (廿一才)と去る十
 十男結婚 盛大な披露
 を張つた

